埼玉大学文化科学研究科修士課程学位論文・特定課題研究成果要旨

研究専攻（専門領域）	文化構造研究専攻	学籍番号	03CS009
氏名 押田　千明	ローマ字 OSHIDA Chiaki	国籍（留学生）	

修士学位論文名	オランプ・ドゥ・グージュと「黒人奴隷制度」 ―戯曲『ザモールとミルザ』（1783 年）から「女性及び女性市民の権利宣言」（1791 年）に至るオランプ・ドゥ・グージュの思想の変遷―		
提出年月日	2009 年 1 月 13 日	指導教員	小林　亜子
体裁（　論文　）	48 頁（1 頁文字数 1600 字）	言語	日本語
別冊添付資料等	補 39 頁		
キーワード	オランプ・ドゥ・グージュ　フランス革命　黒人奴隷制度		

本稿は、1791 年に発表された「女性及び女性市民の権利宣言」の著者として知られるオランプ・ドゥ・グージュが、これに先立つ 1783 年、彼女の処女作として執筆した戯曲『ザモールとミルザ、あるいは幸福な難破』及び、二度の改訂を経て『黒人奴隷制、あるいは幸福な難破』という題名で完成されたこの戯曲の検討をもとに、当時の紙誌や、グージュによって書かれた手紙なども史料として用い、グージュが「女性の権利」を主張する以前から持っていた人権思想、即ち「黒人奴隷」と「非嫡出児」に対する問題の提起に着目した上で、戯曲の上演を巡るコメディ＝フランセーズとの確執や、上演後の反響が、彼女の思想に与えた影響について論じたものである。

オランプ・ドゥ・グージュに関する従来の研究においては、「女性及び女性市民の権利宣言」にのみ焦点が当てられることが多く、それ故、「フェミニズムの先駆者」としてのイメージばかりが先行し、彼女がそれ以前から戯曲の主題に選び、問題を世に訴えていた黒人奴隷制度に関する思想については、グージュの女性の権利に関する思想に付属するものとして扱われ、あるいは無視されることすらある。また、戯曲『黒人奴隷制』について論じた研究者たちのほとんどに、グージュの黒人奴隷及び、黒人奴隷制度に関する思想、女性の権利に関する思想、そして革命に関する思想を別個に、あるいは全て並列させて捉える傾向があった。

しかしながら、3 つのテクストを検討してゆくと、いずれのテクストにもテーマとして「女性の権利」を示唆する台詞も場面もない。彼女が女性の権利に対する思想に目覚めたきっかけは、戯曲の上演後、「あごにひげがない」作家を酷評する記事が新聞に掲載された経緯にあったと思われる。その数か月前に発布された「人及び市民の権利宣言」が巧みに隠した不平等を暴露する「女性及び女性市民の宣言」の構想は、その後に練り上げられたものであろう。そして、「人」の枠組みから「女性」を弾き出す革命政府そのものに対する不信感から、これに異議を唱えるために革命に参加したのではないかという、彼女の思想の変遷を仮説として提示することができるのである。

オランプ・ドゥ・グージュは、革命政府をもってしてもすぐには決議できなかった「非嫡出児の相続権（1793 年 6 月 3 日決議）」と「黒人奴隷制度の廃止（1794 年 2 月 4 日に最初の決議）」の問題を早くから提起し、また、「女性」を「人」に含めない彼らの不平等の実態を暴き、『三つの投票箱』という連邦制を支持するビラによってモンターニュ派の理念である共和制に異議を唱えた人物であった。グージュの膨大な著作の中には、フランス革命期の人権思想だけではなく、革命政府が隠そうとした負の側面を明らかにする性質が含まれていることが予想され、さらなるグージュ研究の前進の、可能性と必要性とを示すことができるのである。